KAN 環

星月夜
2016
第 24 号

千曲川地域の人と文化

NPO法人上田図書館倶楽部　　2016 年 10 月

千曲市の県立歴史館野外に、喧騒から離れて茅葺屋根の家屋がある。
美しい紅葉林と調和し、古き良き時代をしのばせる。

表紙写真・文　矢幡正夫

contents

4　躍働 ---------- 伊藤文子
日本で働くベトナム女性
ズオン・ティ・ゴック・フェンさん

8　寄稿 ---------- 山口　登
自然を友に信州の日々を楽しむ
（一）木曽谷で初めての天文台をつくる

13　上田情報ライブラリーでは今・・・ ---------- 望月聡子
「図書館貴重資料の巡回展」
～上田市合併 10 周年記念事業～

15　信濃を旅した文人たち ---------- 海野　郁
荻原碌山　～故郷の山河と出会いと～

21　地域に根ざす NPO 紹介
NPO 法人　リベルテ

23　ぶらり散策 ---------- 吉池みどり
染屋城跡・豊染英神社

25　観点 ---------- 岡田基幸
人材採用難と地域イメージ

27　知られざる日本古代史⑦ ---------- 酒井春人
海人族安曇族と古代日本列島

31　あとがき

フロンティア躍働

ズオン・ティ・ゴック・フェンさん

日本で働くベトナム女性

善光寺前にて

「日本に来てほんとうに良かった」。感慨深い表情で話すフェンさんは、ベトナム北部タイグエン出身の26歳。２０１３年10月に３年間の就労ビザで来日し、上田市内の車の部品工場で働く。今でこそ明るいフェンさんだが、当初は「言葉もわからず知り合いもいなくて、ほとんど引きこもり状態だった。故郷のことばかり思い出され、寂しくて仕方なかった」という。

次第に仕事に慣れ、日本語も上達し、今は活動的な日々を送る。富士登山、日本海で水泳、ディズニーランドなど、精力的に日本を旅する。同時に日本語の勉強にも熱心で、7月に日本語能力試験トップレベルのＮ１を受験した。長文読解力や相当な漢字力を要求される難関で、大きな挑戦だった。また、外国人作文コンクールに応募し、優良賞に輝いた。とにかく頑張り屋さんだ。

一方、ベトナム女性24人と暮らす寮生活では、常にお姉さん役。仕事につまずいた後輩を慰めたり、けがをした同僚を病院へ連れて行ったり、細やかに面倒をみる。後輩

たちから一目置かれる存在だ。
　不自由なく日本を満喫しているように見えるフェンさんだが、ここまでの道のりは決して平坦でなかったはず。10月の帰国を前に、3年間を振り返ってもらった。

富士山頂上にて

Q　初めに、日本に来た理由を教えてください。

A　大学4年のとき、外国語選択で英語と日本語をとりました。ベトナムには日本企業が多く進出しているので、有利かなと思って。それとテレビで見る日本は風景がきれいで、ずっと憧れてました。

Q　来てみてどうでしたか。

A　イメージ通りです。街並みも山の風景もとてもきれい。来てみてわかったのは、空気が爽やかなこと。ベトナムの夏は42度くらいまで上がり、暑くて暑くて。クーラーはそれほど普及してなくて、扇風機で凌いでいます。
　一番びっくりしたのは水です。蛇口から出る水がそのまま飲めるなんて……感動しました。ベトナムは煮沸しなければ飲めません。

Q　風景も水も日本では当たり前ですが、改めてそう言われると嬉しいです。ほかにどんなことを感じましたか。

A　日本企業は仕事のやり方が厳しいです。そして日本人はまじめです。ベトナムの日本企業で働いたことがあるので、多少は知っていましたが、改めて感じました。慣れるまで苦労しましたが、自分にとっては良い経験になり、その厳しさを習得することができました。
　生活面では、トイレのウオッシュレットです。気持イイ～、特に便座が暖かくてずーと座っていたい感じ。公共のトイレがいつもきれいなのにも驚きました。翌日届く宅配便、至る所にある自動販売機など便利なシステムがいっぱいです。

Q　日本人についてはどうですか。

A　細やかな気配りに感心します。スーパーの店員や駅係員さんの応対など、おもてなしの心が伝わってきます。女性用公共トイレの中のベビーシートにも感動しました。赤ちゃん連れでも安心してトイレが利用できるんですね。

不思議なのが行列です。蕎麦屋さんやラーメン屋さんの前で並んでますけど、どうしてですか。ベトナム人は時間がもったいないと思って他へ行きます。

Q　どうしてでしょうねぇ（笑）。自分の好きなもの、美味しいものを食べたい気持ちが強いのかもしれません。電車に乗ると き並んで待つので、待つのに抵抗ないのかもしれませんね。

日本の高齢者についてはどう感じましたか。

A　日本のお年寄りは働いている人が多いと感じました。働く場が多いんだと思います。ベトナムでは孫守りと畑くらい。全体に日本のお年寄りの方が元気に見えます。

Q　日本の食べ物はどうですか。食べられますか。

A　お寿司とうどんと天ぷらが好きです。それと果物がすごく新鮮で美味しいです。でも普段は、通販でベトナムの調味料を取り寄せてベトナム料理を作っています。

Q　日本語を流ちょうに話されますが、ひらがな、カタカナ、漢字があり苦労されたのでは？

A　日本に来る前に少し習ってきましたが、やはり難しいです。特に漢字は音読みと訓読みがあり苦労しました。少しずつわかるようになって、漢字は意味があるので理解しやすいと思えるようにな

友達とお花見

りました。今は漢字が大好きです。でもまだまだ難しく、新聞や本は少ししか読めません。

Q　日本に滞在中、最も印象に残っていることは何ですか。

A　「日本のお父さんお母さん」に出会えて、娘のように可愛がられたこと、日本人の知り合いができたこと、彼らと会話ができたこと、富士山に登ったこと、ディズニーランドに行ったこと。（スマホに保存されているたくさんの写真を見せてくれながら）楽しい思い出がいっぱいです。

日本のお母さんと食事中

Q　最後に抱負を聞かせてください。

A　4年後日本に戻ってきて、東京オリンピックで通訳をやりたいです。それをきっかけに観光ガイドになれたらいいなぁと思っています。そのためには英語も習得しないといけないし、パソコンもうまくなりたいし。

瞳を輝かせながら抱負を語るフェンさんはエネルギーに溢れている。3年間で一番良かったことは「仕事や言葉の壁を乗り越えることができたこと。後輩たちの面倒を見て、人の役に立つことができるようになり、それらが自分の自信につながったこと」。「残念なことは、雪が降らないベトナムではできないスキーをやってみたかったけど、チャンスがなかった」。

無限の可能性を秘めているフェンさん。日本に留まらず世界で羽ばたいてほしい、心からエールを送った。

平成28年8月13日取材

伊藤文子

寄稿　**自然を友に信州の日々を楽しむ**　　**山口　登**

（一）木曽谷で初めての天文台をつくる

秋霜の柿［大町市八坂］　撮影：原和明

はじめに

昭和三九年（一九六四）に就職のため長野県に住み始め、いつの間にか半世紀が過ぎてしまった。

編集者から「何かご自身の自然とのかかわりについて書いてみませんか」というお薦めをいただいて、五〇年をふり返ってみると、思い出が次から次へと湧いてきて、数日間は寝床の中でいろいろなシーンが走馬燈のようにうずまいた。

その中から身近な自然観察に関わる思い出を書いてみようと思う。この自然観察に興味をもつようになったのは、昭和四八年（一九七三）に信州大学志賀自然観察研究施設での「公開講座」に参加したことにある。中村登流先生（故人・元上越教育大学名誉教授）と山岸哲先生（兵庫県コウノトリの郷公園

長）のお二人に鳥類観察の面白さを教えていただいた。高等学校の教員として林業を教えていたから、自分の仕事としても関係が深いし、自然観察は趣味の一つにもなったから、常に仕事と趣味の境界線上で好き勝手をやってきたというのが、この五〇年間の信州での幸せな生活であるといえようか。

＊＊＊

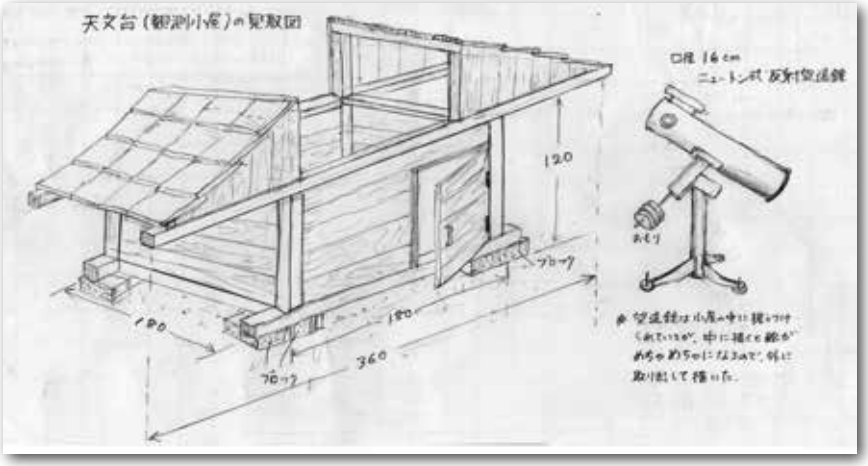
第一回は信州の星空の美しさについての話である。これは中村・山岸両先生と出会う前の話である。

タイトルバックの写真は、大町市八坂の晩秋の風景である。棚田のはずれにひっそりと佇（たたず）んでいる柿の木。田んぼの表面にはうっすらと霜が降りている。こんな情景が見られるようになったときが、信州で一番星空が美しいときなのである。

星が瞬（またた）かない。そのまま静止している。惑星ならまだしも恒星すら瞬かない。これが晩秋から初冬にかけて、移動性高気圧にどっぷりとおおわれたときの信州の最高に美しい星空なのである。

私は東京渋谷の生まれだけれど小学五年生のとき、臨海学校で行った千葉の房総半島の岩井海岸で、水平線から立ち上がる天の川の美しさを見て、星の虜（とりこ）になってしまった。それからは天文少年としての日々を送ったが、悲しいかな渋谷では三等星がやっとみえるかどうかであった。

それが昭和三九年に木曽に住むようになったのだからたまらない。天文少年の頃の情熱がむらむらと噴き出し、昭和四一年（一九六六）、自分で天文台を作ると宣言してしまった。天文台とは何とも大げさ



な表現だが、その頃はその言葉しか思い浮かばなかった。

前頁のスケッチ図を見ると吹き出して笑う人がいるかもしれないが、本人は大まじめにこの天文台の建設に全力を傾注した。幸い勤務していた木曽山林高校には工芸科という学科があり、家具や木製の小物等を生徒たちが実習で作っていた。その指導をしている大西貢先生が全面的に協力してくださり、転勤するときのことも考えて壁は四枚のパネル状にして、本格的なほぞ接ぎで釘を使わないで組立できるように考えてくれた。

屋根はまん中で左右に分かれ、レール上を動かして開け閉めするが、軽い方がよいので、大西先生が木曽で昔使われていたサワラの板瓦を探して来てくれた。

望遠鏡は旭光学製の一六センチ反射望遠鏡を共済組合から借金して購入し、小屋を組み立てる一週間前に台座のところだけコンクリートを打ち、望遠鏡を固定するためのボルト三本を埋め込んだ。

小屋の組立をする当日は、町内に住む生徒たちが手伝いに来てくれ、学校から私の下宿まで材料を肩にかついで運んでくれた。重要な箇所は大西先生がほぞ穴をくり抜いてくれたので、小屋は見事に組み上がり、その日の夜、生徒もいっしょに小屋の入口に塩を盛ってお神酒（みき）をあげ、皆で柏手（かしわで）を打って完成を祝った。

この小さな天文台が完成してから八年後の昭和四九年（一九七四）四月に、木曽福島町・三岳村・王滝村の三町村の境界上の幅広い尾根上に、東京大学木曽観測所がオープンし、一〇五センチのシュミット望遠鏡が観測を開始した。

私が下宿の裏手に小さな天文台を開設した頃には、すでにこの天文台の適地を探すために候補地の気象データを集めていたと思われるが、私の選択は間違っていなかったと自負したものである。

後年、この東大の木曽観測所を見学したが、木祖村出身で木曽西高校ＯＢの青木さんが文部技官として勤務されており、次ぎのようなエピソードを話してくれた。それはこの観測所は、全国の大学の天文学研究者の共同利用施設になっていて、研究者がテーマによって三泊四日とか五泊六日とかの日程で観測に来るが、その日程を前年度の末に決めるとき、この観測所に所属する専任の研究者は優先的にその日にちを選ぶことができる

のだという。その結果、十一月から十二月初旬のところは、すべて専属の人たちの日程で埋まってしまうということだ。

この晩秋から初冬の木曽の空は、空はどこでも同じ空のはずなのに、経験的に最高だということが定説になっているのである。

ところで私の星空観察はどうなったかというと、あの天文台が完成したらすっかりエネルギーが切れてしまって、お気に入りの星団や星雲に望遠鏡を向けて星空を楽しむ程度になってしまった。

さらに、二校目に勤務した学校で、校内事情により「生物」の科目を持たされたことがきっかけで、天文から動植物のほうに興味が移り、冒頭でふれた公開講座が縁で鳥の生態観察にのめりこんでいくのである。

さて、この天文については第二幕がある。昭和五二年（一九七七）に再び木曽山林高校に転勤になったが、たまたま昭和五五年（一九八〇）に木曽福島町内の木曽西高校と木曽東高校が合併して木曽高校になるということで、新校舎の建設工事が始まった。

ある日、つきあいのある木曽西校の物理の北沢和雄先生から「東西二校が合併して新しい学校ができるのだから、何か記念になることをしたいが、いい知恵はないだろうか」と、何気なく言われた。私はその場で間髪を入れず「星空がものすごくきれいな木曽だから五階建ての新校舎の屋上に、小さな天文ドームを作れば天文好きの生徒が続々生まれるよ」と提案した。

北沢先生の熱意で話はトントン拍子に進んでドームが出来ることになり、望遠鏡は私の案が参考になって三〇センチのカセグレン式反射望遠鏡が設置されることとなった。

五六年十二月十五日、京都の望遠鏡メーカー西村製作所の手で望遠鏡の取付と調整が行われ、夜の九時過ぎだったろうか、「どうぞ見てください」と声がかかった。木曽西高校の天文部の生徒が一人

木曽青峰高校に引き継がれた天文ドーム

づつ交代で接眼鏡に目をあてると、オリオン大星雲のピンクの雲が視野の中に鮮やかに現れた。

そして第三幕。それからさらに二〇年も経過した頃、某ＮＰＯ法人に所属していた私は、都会から信州へ修学旅行等で訪れる子どもたちの、星空観察のインストラクターをしていた。星空観察もさることながら、天気が悪くて星が見られないときに、私が教えてあげる宮澤賢治の『星めぐりの歌』の方が人気があったかもしれない。

最後に星空のインストラクターをやったのは、二年前の菅平だったから、星との付き合いは六〇年以上ということになる。

著者略歴

昭和 15 年 (1940) 東京生まれ。昭和 39 年 (1964) から長野県内の農業高校で林業担当の教員を勤める。その後、環境調査・森林ＮＰＯ活動等にかかわり、現在は木曽山林高校跡地にある「木曾山林資料館」のスタッフ。

木曾山林資料館

http://kisosanrin.org/

林業専門の実業学校・実業高校である「木曾山林学校・木曽山林高等学校」を記録するホームページ。

木曾山林学校は、明治 34 年（1901）4 月に、我が国で最初の林業科をもつ実業学校として誕生。昭和 23 年（1948）4 月に新制高校・木曽山林高等学校となった。その後、平成 21 年（2009）3 月に普通高校である木曽高等学校との統合により閉校となり、108 年の歴史の幕を閉じた。

平成 26 年 (2014) 3 月、木曾山林資料館が所蔵している林業教育にかかわる資料と、資料館の目の前に広がる演習林が、日本森林学会から「林業遺産」に認定された。

上田情報ライブラリーでは今・・・

「図書館貴重資料の巡回展」
～上田市合併 10 周年記念事業～

今年、上田市は合併 10 周年を迎え、記念事業があちこちで行われています。市内の各図書館（上田、丸子、真田、上田情報ライブラリー）では、それぞれが所蔵する貴重資料の巡回展を行っています。4 館が 1 か月を目安に資料を交換し展示します。期間は平成 28 年 7 月から 10 月末まで。通常は書庫で大切に保管されていて、なかなか見ることができないものばかりです。この機会にぜひご覧いただければと思います。

以下は上田情報ライブラリーの企画です。

7 月は「櫻井善雄文庫展示」と題して、「千曲川と生物」の調査資料や「川」と「生命」の生態に関する研究資料などを展示しました。情報ライブラリーは、「千曲川地域文化の創造と発信」をコンセプトにしていることから、千曲川に関する資料を積極的に収集しています。例えば、平成 26・27 年に真田町在住の信州大学名誉教授・櫻井善雄氏からご寄付いただいた河川や水質に関わる多くの資料などです。今回その中から、

川とその周辺の生物に関わる本をご紹介。一般に流通していない河川の専門書籍から洋書まで、貴重な研究資料で、1976 年 1 月、信濃毎日新聞社出版、信州大学山岳科学総合研究所著「山と里を活かす自然と人の共存戦略」や、平成 13 年 9 月、北陸地方整備局出版「信濃川河川環境情報図」などがあります。（※図書館貴重資料の巡回展　目録より）いつもたんたんと流れている千曲川について、すこし知識を深めてみるのもいいかもしれませんね。

8 月は、丸子図書館より寄贈された、江戸時代の国学者・俳人で歌人の北村季吟が手掛けた万葉集の注釈書、9 月は真田図書館より寄贈された、大正時代に女性の地位向上に多大な貢献をした、平塚らいてうの生涯を取り上げた女性史コレクション、10 月は上田図書館より寄贈された同市出身の実業家で江戸庶民文学研究家の飯島花月が収集した資料の一部が展示される予定です。

図書館は、本やＤＶＤの貸し出しの他、古文書や郷土資料など、地域に密着した重要な書籍の保存も行なっており、次の世代へ引き継ぐ大切な役割も担っています。中には摩耗により貸し出しできない本もありますが、館内で閲覧できる場合もありますので、受付でご相談ください。

そして、10 月 23 日（日）丸子文化会館セレスホールにて、直木賞作家辻村深月さんを迎えて、図書館講演会「本の力、図書館の魅力」（入場無料）を開催いたします。是非ご参加ください。

平成 28 年 9 月取材　　望月　聡子

信濃を旅した文人たち

荻原碌山　～故郷の山河と出会いと～

碌山も眺めた！　遥かな山並と田園風景

「ある日の帰途、日はもう正午に近い頃、矢原の田圃みちに山を見て立っている一人の少年があった。木綿縞の袢纏（はんてん）に雪袴を穿（は）いて、それでひとしおにずんぐりと小肥りに見え、まるい顔が邪気なく初々しかった。その少年が後の碌山、守衛さんであった。絵が好きなので暇さえあればこうして写生をするのだといい、それが直接にものをいう初めであった。」

（相馬黒光著『穂高高原』）

17歳の守衛（注）が、相馬愛蔵と結婚したばかりの良（注）と出会う場面。ドラマなどでたびたび演じられてきた印象深いシーンだ。

（注）守衛・荻原碌山（1879～1910）

（注）良・相馬黒光（1875～1955）

碌山生家がある穂高町矢原は、西に常念岳を望む豊かな田園地帯だ。人影もなく、畦道には静寂が広がる。ふたりが出会ったのはこのあたりだろうか。１２０年前にタイムスリップして、パラソルをさした良と、純朴な守衛少年が現れてきそうだ。

一角には荻原家の墓地があり、「故碌山荻原守衛之墓」と中村不折により刻字された墓碑が建つ。

お参りをすませて、生家を訪れる。土蔵の前に「荻原碌山生家」碑が建つ。碌山については、さまざまな研究、著作がなされているが、

故碌山荻原守衛之墓
（中村不折書）

直系のご子孫にお話を伺いたいと以前から考えていた。

碌山の長兄の孫にあたる、現ご当主・荻原義重（よししげ）さん（72歳）が出迎えてくれた。玄関には碌山美術館を描いた大きな絵、続く廊下や案内された部屋にもたくさんの写真が並ぶ。

Q　碌山について、ご家族の間で語り継がれていることなどをお聞かせいただけますか。

A　この家は私の母が跡を継ぎました。碌山が亡くなった時は4歳くらいだったので、記憶にはないけれど、祖母りょうや両親から碌山の生き様を聞いていたようです。また、母の妹孝子は独身を通し、長年、碌山美術館の副館長を務めながら碌山について研究、記録を残しました。子どもの頃、私は、碌山が偉大な彫刻家であるとは夢にも思わず、社会人になってからも仕事に忙しく過ごしてきてしまいましたので、この記録が今になってとても参考になっています。

碌山は5人兄弟の末っ子だったので、とても大事にされ、アメリカへ出発するとき、祖母は可愛い孫のために農耕馬を売って渡航費用を調達してくれたそうです。兄たちも援助を惜しまなかったようで、家族の絆が強かったのだと思います。

母は、「碌山は貧乏ながら、アメリカとフランスで絵の修業をしている時、デッサンの消しゴム用にパン切れを使い、後でそれを食べて

昭和20年代の荻原家、右側が碌山館

生家に残る当時の土蔵

碌山生家碑

努力したんだよ。そして、腕一本を一年間描き続けたんだよ。だから碌山を見習って努力しなさい」と諭してくれました。このことは、私にとって、碌山と母の教訓でもあります。

また、碌山の手紙など約150通を収録した碌山美術館発行の『荻原守衛書簡集』がありますが、碌山は、郷里の先輩・井口喜源治や兄たちに膨大な量の手紙を出していたようです。中には、英語やフランス語のものもあって、実は私は中学の英語教師でしたが、私でも書けないような立派なものです。渡米した当時、ほとんど英語はわからなかったようですが……。残念なことに、兄の穂一や本十宛のものは、処分されたり東京大空襲などで焼失してほとんど残っていません。

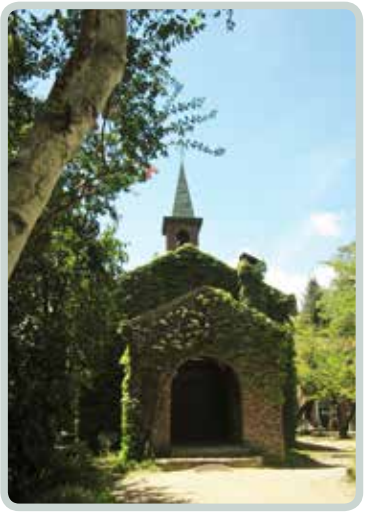
Q　碌山は、彫刻家となって帰国した僅か2年後に亡くなってしまったのですね。ご家族はさぞ悲しまれたことでしょうね。

A　大変ショックだったようです。たくさんの人がその死を惜しんでくれ、「碌山が亡くなってから、わざわざアメリカから墓参に来てくれた人がいたんだよ」と、母が話してくれました。碌山はアメリカ滞在中、フェアチャイルド家で家僕として働きながら美術学校に通っていましたが、その家の母親エリザベスさんと、娘のサリーさんが来てくれたんだそうです。なぜこんなに遠い異国の地まで、どうしてだろう、といまだに考えてしまいます。

Q　亡くなった後、新宿中村屋で保管されていた作品を引き取られた

そうですね。

A　はい、大正4年、碌山の長兄・十重十が作品すべて引き取り、敷地内に「碌山館」を建てて無料で公開していました。その後、私の父が作品の寄贈を決断、約30万人もの少年、少女、一般の方たちの寄付によって、昭和33年、碌山美術館が開館しました。最近、収蔵庫が最後に出来あがり、50年たってやっとひとつの形に完成したんですよ。



安曇野のシンボル
碌山美術館

Q　碌山が暮らした当時の生家で、残っているのは土蔵だけとのことですが……。

A　昭和45年4月、未明の火事で土蔵と数本の庭木を残してすべて焼けてしまいました。その数年前、県文化財保護委員会から「碌山の生家を県の史跡に指定したい」と話がありました。ただ、私がまだ大学生だったため、3年後に再検討することになり、受諾した2週間後の事でした。

帰国後、生家にしばらく滞在していた時のものと思われますが、父を描いた《ファーザー》や、お盆に姪、甥を描いた油絵、そして中村不折の書などの宝物も失ってしまいました。

穂高町矢原の畔道
（左側が荻原家墓地、
右側木立付近に相馬家がある）

Q　絵を描いていた碌山が、黒光と出会った畦道は、この家のすぐ裏手あたりでしょうか。

A　今は基盤整備して大分変わりましたが、私が小さい頃は昔の狭い道がありました。この先の矢原公民館の南に、明治のころから

臼井さんという内科の医院があって、黒光さんはこのあたりの田んぼ道を通っていたのではないかと思います。

黒光に出会わなかったら、碌山は彫刻家になっていなかったでしょうね。情報もない時代、女学校出のハイカラな女性により、この片田舎に突然都会の空気が入ってきたのです。嫁入道具のひとつ、油絵の『亀戸風景』を観たことで、碌山の人生が変わったのです。相馬家には、新しい文化にあこがれて大勢の若者が集ったのですが、みんながみんな画家をめざしたかというとそんなことはない。やはり碌山は特別だったのだと思います。また、愛蔵さんも教養ある文化人でしたし、井口喜源治の博学的なものにも非常にあこがれたのでしょう。

Q　碌山の日記『つくまのなべ』にも、相馬家にたびたび通う様子や、「アゝ才智ある婦女子の會話は実に喜しきものなり」などと書かれていますね。こうした人との出会い、そして安曇野の自然も、碌山にとってのキーワードだったのではないでしょうか。

碌山が愛した万水川は犀川と合流
（大王わさび農場付近）

A　安曇野は、日本で住みたいところの筆頭のひとつだそうですよ。このあたりの古い家や田んぼなどは、私が小さい頃からほとんど変わっていません。西を見ればゴツゴツした常念岳があり、豊かな水が湧く肥沃の地です。碌山も常念岳を仰ぎながら、万水川（よろずいかわ）の水ときれいな空気の中で育ったのです。アルプスおろしは今よりずっと冷たかったと思いますが、厳しい冬を乗り切って生きていたのですね。当時、我が家ではわさびを作っていて、碌山も開墾などを手伝っていたようです。故郷の自然が、碌山に大きく影響したのはまちがいないでしょう。

Q　最後に、碌山への思いをお聞かせいただけますか。

A　碌山が60歳位まで生きて

いたらどんな人生を歩んだだろう、どんな作品が生れただろうかと思いますが、30歳5か月、《女》（注）をもって碌山の命は終りました。それでよかったのではないだろうか。人生は時間ではない。碌山は、一日24時間を人の2倍生きたのではないかと思っています。

（注）最後の作品《女》は国の重要文化財第一号に指定された。同じく《北條虎吉像》も重要文化財指定。

……ありがとうございました。

ご当主・義重さんは、現在碌山美術館の評議員をしながら、美術館友の会だよりに「碌山こぼれ話」を連載されている。仕事や子育て真最中の、ご自身の子どもたちに残したいと始められたそうだ。その思いは、これから先も受け継がれていくことだろう。

荻原家を辞して、久しぶりに碌山美術館に向かう。安曇野のシンボル、真夏の美術館には、まばゆい光の中をたくさんの人が訪れていた。

美術館の正面、砂岩の壁には「LOVE IS ART，STRUGGLE IS BEAUTY」（愛は芸術なり、相克（そうこく）は美なり）という碌山の言葉が刻まれ、かすかに金色の光を放つ。

現ご当主・荻原義重さん

《文覚》《デスペア》、そして《女》へと歩みを進めながら、ここには碌山の魂が確かに生き続けていると思った。

平成28年8月1日訪問

海野　郁

（参考文献）

『つくまのなべ　荻原守衛の日記』信濃教育会出版部

『碌山　愛と美に生きる　彫刻家荻原守衛』碌山美術館発行

『荻原碌山　―その生の軌跡―』仁科惇　柳沢書苑

『相馬愛蔵・黒光著作集1　穂高高原』郷土出版社

地域に根ざす NPO 紹介

NPO法人 リベルテ

1．どういう目的のＮＰＯ法人ですか？

リベルテは障がいのある方たちとともに「何気ない自由」や「権利」を尊重し、考え実践していける社会や人、関係づくりを行っていくことを目的にしています。

2．具体的にどのような活動をしていますか？

メインの事業としては、障がい福祉サービスとして就労支援継続B型と生活介護の多機能型の福祉サービスを運営しています。
また文化事業として福祉やアートの実践を紹介し、新たなケアやアート、コミュニティーを企画することも行っています。

3．社会にどういうことを伝えていきたいですか？

障害のある方の日々の「からだ」と「こころ」や社会的な状況は、

その日「生きること」に切実です。ですが、人が「障害」と一緒に生きるということは、福祉制度の中だけの問題ではありません。人が生きる上で、人との関係や社会の中で生じる「摩擦」が、ひとりではどうしようもできない困難となる時に、それは「障害」となると考えています。人や社会、そして文化の中で、人が生きづらさにうずくまってしまうことを、リベルテはその人だけの問題にしたくはありません。

すでに地域の中で一緒に生きているということを、アートやケアを通じて考え、取り組んでいくことについて発信したいと思います。

4. 基本情報

（1）活動開始時期
2014 年 5 月
（2）会員数　20 人
（3）主な活動資金
　　訓練等給付費
　　介護給付費
　　民間助成金、公共助成金など
（4）運営委員　リベルテ理事会
（5）事務所　長野県上田市中央 4 丁目 7-23
（6）TEL&FAX　0268-75-7883

ぶらり散策

染屋城跡・豊染 英 神社

（上田市古里字英2144-イ）

国道 18 号線材木町一丁目の信号を山側に折れ、細い坂道をしばし登ると、右手に歴史を感じさせる神社が見えてくる。ここが豊染英神社で、かつての染屋城である。

豊染英神社がある場所には土塁が残り、社の東側は空堀になっている。ＮＨＫ大河ドラマ「真田丸」が放映中だが、第二次上田合戦の折、徳川秀忠が染屋台に着陣したとされるのが染屋城である。

戦国時代の上田は、村上氏のあと武田氏の領有するところとなった。武田氏滅亡後は、真田昌幸の支配下に置かれた。

上杉謙信の重臣であった大熊朝秀は、武田信玄に内通して重用され、武田氏滅亡後は真田昌幸に仕えた。昌幸が上田城を築いた時、上田城の東を守る染屋城を与えられ、大熊屋敷とも呼ばれた。土豪の居城といった規模であったようだ。

この高台の染屋城を、徳川秀忠が上田城を攻める前線基地としたのだ。現在は木々が生い茂り、街中には高層ビルが建ち並ぶため上

田城は望めないが、当時は眺望が良かったことがうかがえる。

二度に渡り徳川軍を破った真田昌幸であったが、関ヶ原の戦では西軍石田三成に加担し敗戦。所領を没収され、九度山に流配の身となり、染屋城は廃城となったとされる。

現在、境内にはブランコや滑り台の遊具が置かれ、地元の子らの遊び場となっている。時には子供相撲大会などが行われるというが、境内に佇むと、大熊朝秀や徳川秀忠が隣にいるかのような思いにとらわれる。神社の周りは遊歩道になっている。案内板に沿ってグリーンベルトを歩きながら、往時を偲ぶのも趣があってよいだろう。

平成 28 年 9 月 12 日訪問　　吉池　みどり

ＮＨＫ真田丸案内

神社入り口

石垣の跡

観点

人材採用難と地域イメージ

最近、地域の企業から人材採用についての相談が増えている。大企業から中小企業まで製造業が集積する東信州地域では、技術系や情報系人材の採用の状況が、企業の業績に大きく影響する。企業にとっては、仕事の引き合いはあるが、対応できる人材がいないといった状況は、単に新しい仕事を受注できないだけではない。今、受けている仕事ごと、人材豊富な他社・他地域に移管されるかもしれないのだ。

信州大学の理工系の学部の卒業生は長野県外への就職が８割程度と多く、長野県工科短期大学校、長野高専の卒業生も引手数多だ。地域の企業は技術系や情報系人材の確保に必死だ。このような状況もあり、高校生の進路先として理工系が人気となっている。地域外に目を移せば、東信州出身の首都圏等在住者でＵターン就転職希望者や、東信州で働きたいと思うＩターン、Ｊターン就転職希望者も確実に増えている。その方々と地域企業が上手く出会えていないことが残念だ。就転職のマッチングは、単独の自治体ではなく東信州の自治体が連携して取り組むべき急務の課題だ。佐久市に住居を構え、上田市の企業にしなの鉄道で通う、その逆もあり得る。まずは、「東信州で働く」ことについて、良きイメージを浮かびあがらせることが必要で、いわゆる、地域のブランドの構築だ。

「東信州で働く」ことについて、良きイメージとはどのようなことか、いくつか列記したい。

①東信州出身者以外でも、地域に溶け込みやすい雰囲気

②市立となる長野大学やARECにて、社会人教育を受けられる環境

③社外同期の交流や研鑽を図れる場
④時短、季節休暇など多様な働き方の認容
⑤地元高校生の地元定着への支援　等である。

こういった地道な努力を行政と地域の企業が一体となり、継続的に取り組み、情報を発信し続けることで、東信州地域での就転職に興味を持つ方々が増え、実際の行動につなげてもらえるはずだ。日本人だけでなく外国人もじゅうぶんにありえる。

一般財団法人浅間リサーチエクステンションセンター
センター長・専務理事
信州大学繊維学部　特任教授　工学博士
上田市総合戦略推進協議会会長　岡田基幸

上田城跡東櫓からの展望。近代の建物からは戦国時代を物語る姿は見えず、４００年という歳月を感じさせる。真田氏時代には、千曲川の流れが石垣の崖下にあって、守りにも強い構造となっていた。今は城跡公園として、また桜並木や芝生広場が広がる憩いの場として多くの市民や観光客が訪れる。

知られざる日本古代史⑦

海人族安曇族と古代日本列島

安曇族研究会会員　酒井春人

玄界灘に浮かぶ安曇族の本拠地志賀島

白村江の戦い

毎年九月二十七日、安曇野市の穂高神社では「御船祭」と呼ぶ、秋の例大祭が斎行される。この祭は、奇祭と呼ぶに相応しい。巨大な舟を模した山車（大人船二艘・子供船三艘）が市内を練り歩き、最後には神社境内に曳き入れられた子供船が神楽殿の回りを三周し、その後、二艘の大人船が境内で激しくぶつかり合う勇壮な祭を特徴としている。

穂高神社の御船祭　２艘の船を激しくぶつけあう（穂高神社提供）

山国信州で、なぜ船を使った祭が行われるのか。そこには古代海人族安曇族との深い関係性が存在しているからだ。

西暦六六三年、倭国水軍は朝鮮半島での唐・新羅連合軍対百済の戦いに百済支援の旗を掲げて参戦した。世に言う「白村江（はくすきのえ）の戦い」である。『日本書紀』から、白村江の戦い以前からの経緯を見てみよう。

舒明（じょめい）天皇が亡くなった翌

年の六四二年、阿曇連比羅夫が百済の弔使を伴って帰国する。このとき、比羅夫は冠位十二階制の三番目に当たる大仁の位を得ていた。さらに同年六月二十四日には、百済の王子翹岐を比羅夫の家に住まわせている。

さらに斉明天皇三（六五七）年、阿曇連頬垂が、冠位十三階制の第十番目にあたる小花下の位を得て、西海使という役職を与えられ、百済に派遣されて、帰国時にラクダ一匹とロバ二匹を持ち帰り、朝廷に献上している。

続いて六六一年八月には、唐・新羅に侵略され滅亡の憂き目に遭った百済に阿曇連比羅夫や阿倍臣比羅夫らが、武器や食糧支援のため派遣されている。

盛んに百済支援を行っている倭国の姿が浮かび上がるが、ここで活躍しているのは、阿曇連比羅夫をはじめ、阿倍臣比羅夫ら海人族の人々である。とくに阿曇連比羅夫は、百済王家と密接な繋がりをもち、百済滅亡後の六六二年には日本へ渡来した百済の王子豊璋を連れ、水軍一七〇隻を率いて百済に渡り、滅亡した百済再建のために豊璋を百済の王位に就けている。

そして白村江の戦いで、倭国水軍は、唐・新羅連合軍の圧倒的な兵力の前に敗れた。

『日本書紀』には記されていないが、この戦いで阿曇連比羅夫は戦死したとされ、その命日が旧暦の八月二十七日であったという。

冒頭の穂高神社の御船祭は、この阿曇連比羅夫の命日（新暦の九月二十七日）を記念して行われる祭である。玄界灘の荒波を渡る倭国水軍の軍船、また激しく船がぶつかりあう様は、白村江の戦いを表現しているとも言われている。それほどに阿曇連比羅夫は、安曇族の英雄として、長く称えられてきた。

穂高神社境内の一隅には、軍装し、槍を持ち軍船に立つ比羅夫の

阿曇連比羅夫の勇姿像（穂高神社境内）

銅像が建てられている。

また、遠く琵琶湖の畔（ほとり）、滋賀県高島市の安曇川（あどがわ）町には、比羅夫の墓と伝えられる墓所が存在する。安曇川町もまた、安曇族の関係地として知られる所だが、比羅夫は山城国（現在の京都府南部）に住んでいたとされることから、安曇川との関係も浮かび上がる。いずれにしても安曇族にとって、比羅夫の死は、また一族の衰亡を意味していたのかもしれない。

阿曇比羅夫の墓
墓碑には「宝永三年（1706）丙戌十一月二十四日大将軍墓補　川妻善太夫」と刻まれている。人々は「大将軍塚」と呼び、阿曇比羅夫の墓と伝えている（滋賀県高島市新旭町）

ところで、白村江の戦いの敗戦は、倭国にとって大きな痛手となる。中国の史書『旧唐書』によると、「日本は倭国の別種也」と記されている。筆者は日本（いわゆるヤマト王権）と倭国は別の国であったと考えている。『三国志』の「魏志倭人伝」に登場する奴国あるいは伊都国、邪馬台国などの連合体が倭国であり、その倭国は北九州全域のみならず、朝鮮半島南部にあった狗邪（くや）韓国も倭国の領土であったと考えられる。その根拠は「魏志倭人伝」に魏使が韓国の南端に着いたとき、「倭国の北岸」に着いたと記述していることから理解出来る。その後、倭国はこの狗邪（くや）韓国に変わる金官国・伽耶国・任那・百済南部などを支配していることから、倭国は北九州と朝鮮半島南部地域を領土とした国であったと考えられる。

倭国滅亡とヤマト王権の成立

おそらく中国江南地方から紀元前五世紀頃に日本列島にやってきた海人族系の民族は、九州だけでなく、対馬・壱岐、あるいは朝鮮半島南部に海流に乗って上陸した。したがってその民族は同族の民であった可能性は高い。それゆえに、倭国は百済滅亡を目の当たりにして、同族救援に乗り出す。白村江の戦いの背景には、おそらくその辺の事情があったのではないかと思える。

『日本書紀』を仔細に読んでいくと、この白村江の戦いの戦後処理にきわめて不可思議なことが記される。それは、唐・新羅連合軍の占領軍司令官劉仁願（りゅうじんがん）と郭務悰（かくむそう）が、筑紫都督府にGHQを置き、ヤマト王権の所在地と考えられる奈良の三輪山周辺には、来ていない。つまり、戦後処理を九州で行っている。

ということは、唐・新羅連合軍と戦ったのは、筑紫王朝とも呼べる九州の王朝であり、ヤマト王権ではなかったのではないだろうか。白村江の戦いで筑紫君薩夜麻なる者が、八年間唐に拘束されている。この筑紫君薩夜麻が帰国後どうなったかは、『日本書紀』に記されていない。そしてまだこの頃、「日本」という国名は登場していない。あくまでも「倭国」である。「日本」という名が歴史上に登場するのは、前述した『旧唐書』など中国史書、並びに『日本書紀』にも登場するが、それは七〇一年に初めて日本が国号として成立している。

これらのことから類推すると、筑紫王朝とも言える古代王朝が最初九州にあって、それは中国江南地方から紀元前にやって来た安曇族など海人族系の渡来人たちが樹立した王朝であたのではなかったかと考えられるのである。

ヤマト王権が近畿に王朝として成立するのは、どうもこの白村江の戦い後、疲弊した筑紫王朝にかわってできあがったと筆者は考えている。

前号で記した磐井の乱、また白村江の戦いは、いずれも筑紫王朝の話であり、『日本書紀』は、その辺を上手に改ざんして、ヤマト王権の話にすり替えているのではないかと考えられる。

考えてみると、この信州の地は、安曇族、百済、高句麗、新羅など大陸や朝鮮半島の難民や敗残者などが逃げ込んできた、あるいは積極的に送り込まれた可能性が高い地域ではないだろうか。松代の大室古墳（高句麗系）、善光寺（百済系）、諏訪大社（出雲系＝新羅系）、穂高神社（安曇族＝中国大陸系）など、渡来人の痕跡が色濃い地は、他に見当たらない。

北アルプスに守られ、千曲川、犀川など水に恵まれた信州は、さしずめ敗残者にとって安心できる復活の地ではなかっただろうか。

安曇族を追ううちに、日本古代の王朝の話にまで進んだ。次回はさらに話を発展させてみよう。

あとがき

“NHK 朝ドラ ”「ととねえちゃん」は、雑誌「暮しの手帖」の創刊者がモデルでした。

母が「暮しの手帖」を購読していたので、高校生だった私も自然に手にとっていました。50 年経った今でも、トースターや運動靴、ベビーカーなどの商品テスト記事は鮮明に覚えています。藤城清治の影絵が印象的な童話も好きでした。

けれどもいちばん影響を受けたのは「すてきなあなたに」という記事で、「さりげないごくふだんの暮し」のなかで「ささやかな、それでいて心にしみてくるすてき」が書かれています。思春期特有のかたくなな私の心に「オシャレのたのしさ」や「ちょっとした贅沢」、「パリのファッション」や「おいしい料理」に対する憧れを注ぎ込んでくれました。

今、身近な女性たちに「暮しの手帖」の話をすると、驚くほど多くの人が「私も読んでいたわ」と言い、しばらくはその思い出に花が咲きます。写真はそういう友人作の「古いセーターで作った人形」（昭和 57 年 12 月 1 日発行 81 号に作り方が掲載された）です。「おかあちゃん、ちゃんとすわる人形があったらいいな」という子どもの言葉で、着られなくなったセーターにあずきを入れることを思いつき、すわる人形ができたのだそうです。

先日信濃毎日新聞に、「暮しの手帖」についての投稿が掲載されました。「雑誌の影響を受けて今でも直線立ちの服を作ったり、市販の物にはひと工夫加えたりしている」という内容でした。

戦後多くの女性たちに支持された「暮しの手帖」、日常の暮らしをすてきなものにしましょう、というメッセージは今も色あせていないように思います。（幸）

KAN
環　千曲川地域の人と文化　　第 24 号　星月夜
２016 年 10 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部
電話 /FAX　0268-25-3115　　info@zuku.jp

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：伊藤文子　海野 郁　西入幸代
宮下明彦　望月聡子　矢幡正夫　吉池みどり